

小動物臨床現場からみた薬剤耐性菌

小守 忍

日本獣医畜産大学附属家畜病院 (〒180-8602 武蔵野市境南町1-7-1)

小動物臨床では、内科疾患や外科疾患などいろいろな疾患に対して抗生物質が利用されている。薬剤に対する感受性を調べてから、どの抗生物質を使用するか決定することもあるが、多くは感受性試験なしに、病態によって使用する抗生物質を選択するが多い。抗生物質の使用は、術後のように感染予防を目的として、あるいは実際に起こってしまった感染の治療を目的として実施される。このように小動物臨床にはなくてはならない抗生物質ではあるが、耐性菌の存在には頭を悩ませる。耐性菌で苦慮することが多い疾患には、慢性化した犬の外耳炎、慢性膀胱炎、外傷、術後感染などがあり、一般的には内科疾患よりも外科疾患に多い。また逆に、多剤耐性を持った細菌が存在していることがわかっていても手術を行わなければならないこともある。このような時、術創の洗浄、消毒は徹底的に実施するのは当然であるが、術後の感染を防ぐために、少しでも感受性の

ある抗生物質をみつけるよう最大限の努力をしなければならない。

原因菌が多剤耐性を獲得している可能性が疑われた場合には、細菌の同定と感受性試験を実施し、効果のある抗生物質を探すのが一般的である。しかし、感受性試験を実施した何種類かの抗生物質すべてに対して耐性を示す細菌もあり、このような場合には他に感受性のある抗生物質を探すため、感受性試験を再度実施するより方法がない。しかし、結果が得られるまで待ってられないような重篤な患者も存在するわけであり、このような患者に対しては局所の徹底的な洗浄、消毒剤の使用、さらに効果がありそうな抗生物質の見きり発車的な使用を行わざるを得ない。

このような現状にあって、少しでも早く感受性試験の結果が得られること、および多剤耐性になっている細菌に効果のある抗生物質を検索してくれる検査機関の存在を心より希望している。